

何でも読もう会

書物名	『武蔵野インディアン』 三浦朱門	開催 日時	2021.11.2	推薦	富岡
巻・章	全編		青少年セ	出席者	8名
<p>昭56年4月～57年3月、4回に分けて発表された連作小説。 「先祖代々」「武蔵野インディアン」「敗戦」「解剖」の四章で構成。 作者が幼少期～高校時代に世話になった旧多摩地域。その後も折々に接してきた縁の深い地域である。終戦を挟むその前後とその後の同地域の変貌をたどっている。面白いのは、旧来からこの地で暮らす「武蔵野インディアン」と新たに都区部から移り住んだ「東京白人」との対比で話が進むことだ。必ずしも作者の造語ではなく、その以前から構えられていた構図が下敷きにあるようだ。</p> <p>当日集まったメンバーも大なり小なりお世話になり、縁が深いだけに、小説を離れて話が広がった。作者は、独歩の『武蔵野』も当然意識していただろうが、自然描写は殆どなく、良くも悪くも人間臭い、土臭い物語との見方が多かった。インディアン側の登場人物は酋長の末裔というべき土地の大地主、神主、首長が多く、小作民の苦しさが欠けているのが残念との声も。</p> <p>Sさんが都庁から入手した三多摩地図を各人に配り、てんでに旅行、温泉、山登り、醸造蔵などの話に脱線していき、楽しかった。</p>					